

頼本政樹先生の「生徒が前向きに取り組むことができる授業を目指して」について

愛知教育大学 飯島康之

学習意欲の問題。高校だけでなく、小中学校でも話題になることが多い。特定の子の学習意欲という問題でなく、多くの生徒が学習意欲が低いとなると、授業をする先生方は本当にさまざまな努力をされても変わらぬ手応えの少なさに、ときには無力感を感じ、時には腹立たしさを感じ、時にはあきらめさえ感じてしまうのが現実なのではないだろうか。

誤解をおそれずに言えば、そういう現実の中でもがんばっているんだねと、心から拍手を送りたいというのが率直な感想である。

10年ほど前に、学力向上フロンティア推進事業で、いくつかの小・中学校では習熟度別指導が行われ、拝見する機会があった。先生方の配慮や努力をいろいろなところに実感した。40人学級だったら、学習から逃避してしまう子どもも出てしまうときに、そこまで手が回らない。加配教員を生かして、そういう子にも学びを保証するにはどうしたらいいのか。何人だったら目がいきとどくのか。多くの学校で共通していた人数は約10人。そういう子たちを10人程度に抑えれば、「困った」という視線を子どもが送ったらそれを見逃さず、「どうした？」と声をかけられる環境をつくる、あるいは、逃避しようとしても、サッと感じて「どうした？」と声をかけられるようにする。他の子どもは30人集団で問題ないというわけではないが、この子たちに学びを保証するとしたらどうすべきかという意識から習熟度別を選択するという意識はとても強かった。

頼本先生の「仮説」やそれに対する「手だて」を拝見すると、そのときの先生方の思いや議論そして授業の様子を思い出す。「取り組んでみようかな」と思ったときに、それなりの努力で取り組むことができるような課題を用意しておくことはとても重要である。しかし、そこでの学びを出力する機会がないと、参加する必然性も参加している実感もとぼしい。生徒集団が10人になるとそういう必然性も実感も格段に上がるけれども、40人の中でもできることとして、「全員に発言の機会を与える」という手段を取られたのは適切と思うし、50分の中で40人が参加できるように多くの問いをつくるというのは大変なことだろうとも感じた。

そういう先生の努力が、テストの得点などに反映されるころまでいくのは簡単なことではない。でも、まずは継続する（させられる）中から、明日もやってみようという気持ちになれることが大きな第一歩なのだと思う。

たゆまぬ健闘を期待したい。